

道 標

どうひょう

d o h y o

年間特集 「不安」

第四回・生きる軸

東 英子さん

連載

あなたのいのちの物語

死刑囚に向き合う

伝承を科学する

夢まぼろしの現実感

道しるべ

「マムキ」の像

2024 秋季号



年間特集
「不安」

「生きる軸」

第四回 東 英子さん



亡率は激減、周産期死亡、新生児死亡率も著しく減少し、出産自体が命がけであった時代から脱却した。これは、医学・産科管理の進歩、衛生管理の向上、定期健診の普及による。

現在、日本人の平均寿命は男性が81・05歳、女性が87・09歳であるが、健康寿命（健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間）は男性72・68歳、女性75・38歳であり、平均寿命との差の部分は、「老」や「病」に悩まされながら、いつか誰にも訪れる「死」や、「死」に至る過程に対して不安を抱く期間になることが多い。1955年の平均寿命は男女とも60歳台であり、この寿命の延伸の根拠も医学・医療の進歩にある。医学・医療の進歩が身体面において貢献していることに疑う余地はない。

身近なところでは、生老病死に対する不安がある。現代では多くの場合、オギャーと泣いて生まれ、周囲は笑って祝福する。戦後、日本の周産期医療は著しく進歩し、妊産婦死

以前は、個体としての生命は最重要の価値に置かれていなかった。紀元前から近代以前に至るまで、多くの国において身分階層制度があった。それは国家においての、ある種の役割分担をあらわしている。

近世日本における「武士道」を例にとってみよう。「武士道」とは、日本の近世以降の武士階級の倫理・道徳基準や価値基準の根本を形成する思想である。広義には日本の武士階級の「常識」であり、7つの徳目である「義・勇・仁・礼・誠・名誉・忠義」には人としての生き方の軸があらわされている。ここに生命よりも重要になり得るものが内包されていて、現代よりも心静かに老病死を受け容れていたように思えるのは、この生き方の軸に沿っていたからではないだろうか。

ここ数年の不安の種というと、近年頻発している自然災害、数年前に大騒ぎしたコロナウイルス感染症、隣国ロシアによるウクライナへの軍事侵攻などであろう。

歴史を紐解くと、日照り、震災、台風や大雨による水害、飢饉、コレラ、腸チフス・結核・スペイン風邪などの疫病など、災厄は何度も経験している。そのたびに治水、食糧問題、防疫に取り組んできた。そこには、

目先の、個人の利害損失を度外視した大きな人間性をもつ人がいた。この大きな人間性の根底にも「武士道」の徳目が垣間見える。

日本は江戸時代には鎖国政策をしいていたが、江戸時代後期以降、日本と通商しようとしていた隣国ロシアの南下の脅威は、日本の海防、開国への意識改革に向かっていった。

歴史を振り返ると、現代と似たような境遇はいくつも散見されるが、その都度、私儀よりも公儀を優先する人物が居たように感じる。

人はいつからこれほどまでに匿名性にこだわり、過剰に「個」を重んじるようになったのだろうか。他者と比較し、SNSからの膨大な情報に翻弄され、感情を揺さぶられて、不安に陥ることが増え、信頼できる

人はいつからこれほどまでに

「個」を重んじるようになったのだろうか。

他者とのつながりはひと昔前より希薄になった。

このような状況下で、私は「がん哲学外来®」の理念に基づいて、2013年からメディカルカフェという対話の場をもつようになった。「がん哲学外来®」のスタート地点は、がん患者さんのつらさに共感する場であった。病気になるまで意識しなかった自分自身の存在価値、人との関わり、生と死、などについて悩むがん患者さんと、対話を通して「生きる意味」を見いだす場であっ

不安に対峙して「生きる意味」

そして「生きる軸」を見いだしていく

た。メディカルカフェは回を重ねるうちに、「がん」だけでなく、人が人生のなかで経験するさまざまな出来事について語り合う場に進化していった。

そこから、さらに進化・分化して、歴史上の人物の一生を学び、それを通して現代に生きる私たちのあり方を考える寺子屋活動が始まった。寺子屋を始めて2年半ほど経つが、そこは毎回一人ないし複数の人物の一生を学び、現代に生きる自分たちのあり方に照らしてディスカッションする対話の場である。

人物の一生をなぞると、その人物の生き方哲学に触れることができる。人物はハイライトだけではない。私たちの寺子屋では、江戸時代以降の人物を取り上げることが多いが、驚くほど現代にも通じるものがある。考え方ができ、歴史は人が創っている、長い年月を経ても人の心のあり方などは大きく変わることもなく、良くも悪くも同じことを繰り返していることに気づく。

メディカルカフェでは「生きる意味」を見いだすことが多かったが、寺子屋では「生きる軸」を見いだすことが多いように感じる。また、人とのつながりの大切さに気づくことができる。

現代では、自分と異なる考え方の人を排除する傾向が多いように思うが、歴史においては、異なる意見を持ち主であっても、その人物が人として認められる存在であれば、惜しみなく認め合い、そういう意味でつながりが深かったと思われる。

不安は必ずしも悪いものではない。新しいことに取り組むときやさらなる高みを目指すときにも、未知の世界への不安を抱くことがあるだろう。不安そのものはなくなることはないが、不安に対峙する方法はさまざまある。よくわからないものを調べてわかろうとするとか、自分の考え方の癖を改めてみるとか、情報に溺れないように距離をとるとか、方法に正解はない。言い換えれば、全部正解である。不安を少なくする

ように努力してもよいし、不安を抱えたままでも構わない。大切なことは、不安な自分を俯瞰的に観て、慈しむことができるかどうかである。不安と向き合うときに、先人の哲学を知っていることは必ず役に立つし、自分の生きる軸に沿わせることができる。そうして自分の哲学が錬成されていく。それが現代に欠けている精神面の強さではないだろうか。

東 英子（あずま えいこ）

1993年近畿大学医学部卒業。
泌尿器科医として研鑽を積みながら、緩和医療と高齢者医療に興味を持つ。
2004年から在宅医療に従事。
2011年あずま在宅医療クリニック開業。メディカルカフェあずま主催。
一般社団法人エンドオブライフ・ケア協会認定援助士。大阪アーユルヴェーダ研究所基礎・専門講座（薬理学・浣腸療法）修了。日本メンタルヘルス協会公認心理カウンセラー。
Holistic Aromatherapy College 認定アロマ・インストラクター。



「死刑囚に向き合う」

堀川恵子

「教誨師」

これは創作物語ではなく、一人の人物の語りや資料をまとめたドキュメントだ。主人公は一九三三年生まれの浄土真宗の僧侶、渡邊普相。広島に生まれ、渡邊は社会活動をして東京に出るが、挫折する。婿入りして東京の寺を継いだ後、義父の知人の僧侶、篠田龍雄に出会い、二八歳で死刑囚の教誨師の道に踏み込む。

教誨師は囚人に教え諭すことが任務だが、拘置所で行う死刑囚の教誨は特殊だ。殺人を犯した身であるから深い罪業の意識や納得のいかない経緯に対する怨念がある。また、いつ死刑の呼び出しがあるかわからないという恐れとともに独房で暮らしている。

親鸞の教えを支えに囚人に安らぎを与えようとする渡邊だが、自らその役割を担えたと心安らからなかったわけではない。死刑執

行の時、刑務所まで囚人とともに移動し、そこで最後に別れの言葉を告げることも死刑教誨師の役割だ。山本は篠田とともにふたりの囚人の死を順番に送ったことがある。前日、篠田は「渡邊さん。明日のことは、いづれ、あんたひとりやらんといけなくなることです。私がやることを、よおく、見ておきなさい」と言う。

処刑部屋に進む桜井という囚人が、篠田を振り返って、「先生！私に引導を渡して下さい！」と叫ぶ。「引導を渡す」教義ではない。浄土真宗だが、篠田は言う。「よおつし！桜井さん、いきますぞ！死ぬるんじゃないぞ、生まれ変わるのだぞ！喝ーっ！」と。「桜井の顔から、スツと恐怖の色だけが抜けたように見えた」と堀川は記し、その後のふたりの言葉を続けている。「そうか、先生！、死ぬんじゃないぞ、お浄土に生まれ変わるんですね」「そうだ、桜井君！あんたが少し先に行くけれど、わしも後から行きますぞ！」。

その後、高齢の篠田は教誨師から身を引き、渡邊は教誨師会の会

長という役も引き受けるようになる。しかし、渡邊は死刑教誨師への自信を失っていく。「深く暗い森に迷い込んだ。進むべき道を見失った。今、あることから逃げんてはならない」という信念だけが、渡邊をその場に踏みとどまらせていた。かつて焦土と化した広島で多くの人を見捨てて逃げ、そしてひとり生き延びた。あの日と同じ自分を、二度と許してはならなかった。



晩年と言ってよい時期、渡邊はアルコール依存に落ち込む。治療のために入院し、病院から拘置所に通う。面接に行けないことも出てくるが、嘘でごまかすのはいやになった。そして、死刑囚に白状する。「実はわつし、今、アル中で病院に入るとるんじゃない。酒が止められんでね。」

たびたび面接も休んでしもうて、申し訳ないことすな。この噂はあつという間に広まった。ところが、それによって囚人たちは渡邊に親しみをもったようで、彼らの心を開いて接してくるようになった。

こちらが教え諭すなどということではない。「連中によって私が教えられ、育てられてきたんだよなあと、今になってつくづく思いますよ。」「死を突きつけられた人間に対して他人が、そう簡単に「救い」など与えられるものではない。その現実を、渡邊はようやく受け入れたのだ。」

宗教者でなくても、自らのいのちのあり方を振り返るよう、また、他者の心の痛みに寄り添うということの意味を考え直すよう促される物語である。

島園進（しまどのすすむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院グリーンケア研究所客員所長。著書に、『聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちをつくつてもいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

伝承を科学

学

する

夢まぼろしの現実感

私ごとであるが、山口県の実家に、九十歳に近い一人暮らしの、認知症の母親がいる。しばしば世話のために滞在するが、母は最近「ここはだれの家？私はそろそろ帰らなくては！」と言い出す。四十年以上も前から住んでいる自分の家なのに、である。もちろん電気のスイッチの位置も、部屋の配置もすべてわかっていて。だがそれは頭で、知的に理解できることではなくなっているのだ。昨日も、一昨日も、一週間前も、一ヶ月前も、一年前も、十年前も、ずっとここに住んでいたという連続性の感覚、現実感が薄くなったのである。

母は、身体は健康で、夜は熟睡するが、深夜に、突如起き上がることもある。まだ起きて仕事を続けている私に向かつて、大きな声をあげる。「お父さんがまだ飲み会から帰らない。探しにいかなくては！」。「お父さん」（私の父）は、もう五年前に亡くなっているのである。

「お父さんとお母さんが田んぼから帰ってこない、私は先に帰ったが、なぜまだ帰ってこないのか」。真剣に心配している。ここに登場する「お父さんお母さん」とは、五十年近く前に亡くなった母の実の両親である。母は深夜の夢の中、少女時代の、おそらく八十年前のある日の出来事を生きている。

もちろん、この世に「お父さんお母さん」はいない。少し時間が経つと、その姿が夢まぼろしであると気づいてもらえるのだが、夢に登場した場面の現実感、決して薄れない。それには、昼間の生活の現実感が薄くなっていることも作用しているのだろう。

こういつた母の様子は、まるで能楽の夢幻能の作品のようにも見えてくる。

伊勢物語を題材にした、「井筒」という夢幻能の作品がある。奈良の在原寺を訪ねた僧侶の前に、女が現れて、在原業平と井筒の女の恋の物語を聞かせる。夜がふけると、僧侶の夢枕に、業平の訪れを待ち続ける女の幽霊があらわれる。女は、業平の形見の冠直衣を身に

つけて、今は亡き業平を追慕する。女は、ふたりの馴れ初めの場所となった井戸に向かい、冠直衣姿の我が姿を映し、業平の面影を懐かしむ。「さながら見見えし、昔男の、冠直衣は、女とも見えず、男なりけり、業平の面影、見ればなつかしや、われながらなつかしや」。

夢と現実の交錯や推移は、心理学、精神病理学だけではなく、仏教の教えにおいても大きなテーマとなっている。夢は、無いものが在る、在るものは無い、というこの世の真相を説明するのにも、都合のよいものである。夢幻能は、そうした夢の現実感の濃さを物語ってくれるドラマである。



僧侶の夢に現れる人待つ女の幽霊
河鍋豊 画「井筒」『能楽図絵』2より
国立国会図書館ウェブサイト
<https://dl.ndl.go.jp/pid/859441/1/17>

藤田隆則（ふじた・たかのり）

一九六一年、山口県生まれ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えるための応用的研究にも従事

天岸淨圓 (あまぎしじょうえん)

1949年(昭和24年)生まれ。本願寺派布教使。
行信教校校長、大阪教区東住吉西光寺住職。

◆「マムキ」の像

現在の浄土真宗の本尊は木像であれ絵像であれ、立ち姿の阿弥陀仏像である。正式には「方便法身の尊形」とよばれている。ただ、絵像の場合は「マムキ」の像ともよばれている。この絵像が本願寺に見られるようになるのは、親鸞聖人の往生後約百年近くのことである。

多分、真正面向きに描かれていることから「マムキ」とよばれたのであろう。両足を揃えて蓮台上に立ち画面全体に光明を放つ姿は、見る人に大きなインパクトを与えたと思う。この阿弥陀仏像は当時は異色なものだった。多くは画面の左から右に向かつて斜めに仏を描き、両足に蓮台を踏み分けて五色の雲に乗る姿が一般的であった。いつまでもなく臨終来迎を描いたものである。それだけ人びとを魅惑した画面である。「マムキ」には雲がなく臨終でないことをあらわしている。平生に光りを放つ様相である。
仏像にはそれぞれ意味が付けられている。座像と立像があるが立像は行動をあらわす。手の形を「印契」とも単に「印」ともいう。右手を挙げて左手を下している。左手は下げているのでなく、ものを与えるために差し出している手である。右手を「施無畏」印とい

ている手である。右手を「施無畏」印とい、畏れを払うことを意味し、左手は「与願」の印といつて希望を与えることをあらわす。「施無畏」は「悲(悲しみの共有)を」と願は「慈(無償の友愛)を指の円は「永遠」をあらわす。仏教の本質が「慈悲」にあることを示す姿である。

ただ、臨終と平生によつて内容が変わってくる。臨終来迎を主とすれば、「施無畏」は臨終の恐怖を取り除くことになり、「与願」は死後の安楽を与えることとなる。たしかに死の暗黒に対する不安を除くことは本能的にむずかしい。特に死と隣接しながら生きねばならなかった時代の人びとにとつて、来迎は切実な願であった。

しかし、現在の日本で死と死後に深刻な不安を感じる人はどれ程だろうか。「いまの不安は？」と訊くと「いまの生活が続くかどうか」とかえつてくる。安定した生活が持続できるかが主なる不安である。考えてみれば何時どのように崩れるか極めて危うい状況である。世界を見れば「目瞭然」である。この危うさに阿弥陀仏はどう対応してくださるのか、慈悲とは「マムキ」の像とミツタリと向き合う時と思う。

編集後記

現代人は膨大な情報に翻弄され、絶えず不安にさらされている。しかし東先生はその不安と対峙することによつて「生き方の軸」「生きる軸」を見出し、いけるとおっしゃる。「生きる軸」とは何だろうか？

「孤独を逃げるものは勝負師として駄目」「孤独だからこそ球場や舞台に出たときに、初めてそういうものが活きるんだらうから」。これはスパー・スター長嶋茂雄の言葉である。そう言えば箱根での山籠りの自主トレが例年、話題となつていたことが思い出される。それは宮本武蔵のような剣豪の修行に通じるものであったのかもしれない。武蔵は「剣の道」に人としての道を見出していった。ひとり、自分自身と向き合い、己を知る。そしてそこに真の自信が生まれてくる。「生きる軸」とはその道程を指すのであろう。 合掌

仏壇仏具のことは お気軽にお問い合わせ下さい
株式会社 廣瀬佛壇店
0120-81-7065 06-6771-7007
http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/

表紙の絵 仏説靈鷲山(茨城県勝願寺蔵)

「仏(釈尊)は常に靈鷲山に在り」と言われているほど最も長く滞留生活をされた処である。浄土三部経の一つ「観無量寿経」は「王舎城の悲劇」から始まっているので、靈鷲山で説かれたことには間違いないが、残念なことにサン・スクリットやパーリー語の原本は残っていない、残っているのは漢訳の経典のみである。

大谷光瑞師(浄土真宗本願寺派)は探検隊を組織し、四度にわたりインドや西域地方に調査、発掘に赴いたが、その理由は「観無量寿経」の原本を探すことであった。当時の優秀な学生を集めて短期間の内にオックスフォードで現地の言葉を習得させている。第二回目の調査は主としてインドで行われ、王舎城の城郭と靈鷲山を発見した。ラジギル発見はまさに大谷光瑞の努力によるものである。

靈鷲山の周囲には五つの山があり、それぞれの山の木の下は出家が生活する居場所であった。一本の太木の下が出家の修行場であり住居であった靈鷲山は、ラトナギリ(多宝山)の山の突き出した中腹にあり、釈尊の住まいの跡といわれる「グリドラクタ」には棟瓦が残っている。そこに至る道は、七〇年前には夕刻になれば虎の吠える声さえ聞こえる寂しい所であったが、今では乞食ロード化している。

鎌倉や京都で五山といつのも、靈鷲山のあるラトナギリを含めて周囲に五つの山があったことに習ったものである。本山という言葉も同じである。

靈鷲山は王舎城から少し離れている。余りにも釈尊に帰依する出家者が増えたので、それらの人々が生活できる場所としてピンピサーラ王の寄進で初めて「竹林精舎」をつつた。出家者の住まいは瞑想するに静かで、食事供養を受けやすい、比較的街に近い所と決まっている。街から近からず遠からずというのが基本であった。

畠中光享(はたなか こうきょう)

日本画家/インド美術研究者
/真宗大谷派僧侶